

二〇一九(平成三十一)年度 金沢学院短期大学 入学試験問題

一般入試Ⅰ期(二日目)

二〇一九年一月三十一日(木)実施

国語

I 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから15ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

II 解答上の注意

解答用紙は、マークシート用紙と記述用解答用紙の2種類があります。

マーク式の問題で、「解答番号は10」と表示のある問いに対して④と解答する場合は、下記の例のようにマークして

ください。記述式の問題には「解答は記述用解答用紙」と表示がありますので、記述用の解答用紙に記入してください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。

アメリカの心理学者、ウィリアム・ジェームズの箴言^{しん}

「行動(という種子)を植えよ、習慣(という作物)を収穫するだろう。習慣を植えよ、人格(キャラクター)を収穫するだろう。人格を植えよ、運命を収穫するだろう」

今日の社会で見失われがちなのは、長期的な視点です。あるいは、ますますには結果の出ない、未来においてのみ、その意味がわかるような企てといえるかもしれません。ちなみに、現代社会に適応するために必要な行動や生き方の原則を、「ノー・ロングターム(長期思考はだめ)」と表現したのは、アメリカの社会学者リチャード・セネットです(『それでも新資本主義についていくかーアメリカ型経営と個人の衝突』)。

セネットが、このような「ノー・ロングターム」の社会において危機に瀕^{ひん}するものとしてあげているのが「人格(キャラクター)」です。「人格」とは本来、長い時間をかけて^て陶冶すべきものです。人間は、その人生の折々でさまざまな変化と出会い、それにあわせて思考や感情の揺れ動きを経験します。にもかかわらず、人はやがて、そのような短期的な揺れ動きを超えた、より長期的な目標、より長続きする思考や感情をもつようになります。またそれに付随して、より持続的な人間関係、それに基づく信頼や共感の関係を形成していくこととなります。「人格」とはまさに、このような長期的なかわりとともに発展していくものであるはずです。

(a)、短期的に成果を求められる社会において、いったい「人格」を陶冶していく余裕などあるのでしょうか。長期的な目標の追求や、永続的な社会関係の^①イジ^②が困難な社会にあつて、^③すべては挿話や断章の寄せ集めのように見えてきます。そのようななかで、人はどのように自己のアイデンティティを構築していけばいいのでしょうか。

(b)、「キャリア」という言葉は、元々馬車道(キャリアリッジ)から来ているといえます。荷をのせた馬車が日々たどる道筋を表すこの言葉は、やがて人がその生涯をかけて追い求めるべき仕事を指し示すようになりました。しかしながら、「ノー・ロングターム」の社会においては、「キャリア」の意味も変わらざるをえません。今日、キャリア教育という場合、圧倒的に重要なのは進路・就職指導です。より長期的な話をする場合も、「進路を主体的に選択・計画し、その後もより良く適応・進歩できる資質や能力」(文部科学省)と、「激しい社会の変化」に対する、児童や生徒の「選択」と「適応」の能力の向上が強調されます。「キャリア」とは絶えざる選択と適応にほかなりません。一つひとつの仕事についての捉え方もより短期的で個別的にならざるをえないので

す。

また、より短期的に結果を出すことを求められる社会において、物質的にも精神的にもさまざまな経験を積み重ねて、人生の「物語」を紡いでいくことは難しくなります。「物語」とは個別の出来事の羅列ではありません。それは時の流れに意味を与え、人生の諸段階におけるさまざまな行為を調和あるものとして描き出すためのものです。しかしながら、現代人にとつて、そのような「物語」がはたして可能なのか、疑問といわざるをえません。(ウ)「物語」に不可欠な人生の時間軸が、絶えざる変化への適応によって細切れになってしまいうからです。

本節の冒頭でジェームズの「箴言」を紹介しましたが、ここではよき行動はよき習慣を生み、よき習慣はよき人格へと発展していくとされています。現代において問題なのは、まさに、このような発展がほんとうに可能か、という点にあります。セネットの本の原題は「いみじくも『人格のフシヨク』」でした。「ノー・ロングゲーム」の社会で、「人格」は「フシヨク」してしまうのではないか、セネットの本を貫くのは、このような危惧にほかなりません。

同じ事態を、「前のめりの姿勢」あるいは「待つことができない社会」として表現したのが、哲学者の鷺田清一です(『「待つ」ということ』)。鷺田が注目するのは、現代の労働の場において耳にする、「プロジェクト」、「プロフィット」、「プロスペクト」、「プロダクション」、「プログレス」、「プロモーション」など、「前に」を意味する^⑧セットウジの「プロ」に導かれる語の多さです。そこに共通しているのは「前のめりの姿勢」、(c)、先に先にと目標を設定し、逆にその目標から現在なすべきことを規定するという思考法です。

ビジネスの場において、先を予想し、それに基づいて現在の行動を決定することはあたり前だという人もいるでしょう。しかしながら、鷺田は、この「前のめりの姿勢」が、社会のあらゆる局面において用いられることに不安を覚えます。(d)、この「前のめりの姿勢」において、未来とは、現在という時点で予想される未来に過ぎないからです。本来、未来とは、けっして何が起こるか分からない部分をもっています。その意味で、「絶対的な外部」です。ところが、プロジェクトに見られる「前のめりの姿勢」において、そのような「絶対的な外部」は排除されます。すなわち、未来はあらかじめ予想され、予期されるものとして扱われているのです。(e)、セットウジの「プロ」が意味するのは、実のところ(待つ)ことの拒絶だと鷺田はいいいます。(ウ)現在の社会は「待たなくてよい社会」であり「待つことができない」社会だということです。

若者は^④ケイタイ電話の返事を待つことができず、メールのチェックに余念がありません。親は子どもの成長を待つことができず、育児や教育の成果を^⑤イッコクもはやく見たいと願っています。さらにいえば、およそ人は「自分が本当に望んでいるものは何なのか」、時間をかけて問い続けることができせん。成熟することが難しいのが、現代社会です。あらゆる人が、未来に向けて深い前傾姿勢をとり、結果として(き)自分の目の前の地面しか見ていないのが、私たちの生きている社会であるといえるでしょう。

(宇野重規『「私」時代のデモクラシー』による。一部改変。)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

① イジ 1

① 彼女は音楽界ではイサイを放っている。 ② イサイ構わずプロジェクトを推進する。 ③ 明治イシンを成し遂げた英雄。

④ イアツ的な言動が問題となる。 ⑤ プロジェクトのイロウ会を開く。

② フシヨク 2

① 子どもをフヨウする。 ② 目標達成にフシンする。 ③ 単身でフニンする。

④ 海外進出のためのフセキを打つ。 ⑤ フソ伝来の地。

③ セットウジ 3

① 会社にジシヨク願いを出す。 ② 高名な作家にシジする。 ③ ジミに富む料理。

④ ジゼン事業を行う。 ⑤ 人気商品のルイジヒンが出回る。

④ ケイタイ 4

① 記事をケイサイする。 ② 外国企業とテイケイする。 ③ ケイレツ会社に向向する。

④ 好景気のオンケイにあずかる。 ⑤ 改革のケイキとなった出来事。

⑤ イツコク 5

① ヒコク人を弁護する。 ② 使用人をコクシする。 ③ シンコクな悩み。

④ コクサイを発行する。 ⑤ 法廷でコクビヤクを争う。

問2 傍線部(ア)「陶冶」、(エ)「箴言」、(オ)「いみじくも」の本文中の意味として最も適當なものを、それぞれ次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) 陶冶

- ① 一定の型にはめて社会生活を円滑に送れるようにすること。 ② 持っている優れた資質を伸び伸びと発揮させること。
③ なるべく干渉しないで自由に個性を作り上げること。 ④ 妥協せずに理想に向かって地道に成長していくこと。
⑤ 生まれついた才能や性質を鍛えて練り上げること。

(エ) 箴言

- ① 予言 ② 助言 ③ 大言 ④ 格言 ⑤ 巧言

(オ) いみじくも

- ① 本当に適切なことに ② 非常に驚いたことに ③ とてもひどいことに
④ まったく偶然のことに ⑤ 大いに喜ばしいことに

問3 空欄 (a) (b) (c) (d) (e) に入る語としてそれぞれ最も適當なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は a ∥ 、 b ∥ 、 c ∥ 、 d ∥ 、 e ∥ 。

- ① すなわち ② したがって ③ ちなみに ④ しかしながら ⑤ というのも

問4 傍線部(イ)「すべては挿話や断章の寄せ集めのように見えてきます」とは、どういうことか。次の①～⑤の説明のうちで適当なものを一つ選べ。

解答番号は 14。

- ① 経験することが新しいことばかりで、社会に適応するためにはこれまでの常識に頼っている余裕がないということ。
- ② 私たちは常に経験から学ぼうとするが、未来は予測不能なので事前に余裕をもって対処することは不可能だということ。
- ③ 直面することにその都度対応を迫られ、その数々の経験をまとめる大きな意味や文脈を見出す余裕がないということ。
- ④ 一つひとつの経験からそれぞれ貴重な教訓を引き出せるのに、それを丹念に考察する余裕がないということ。
- ⑤ 人生や社会について深く考える精神的な余裕がないために、その場さえ面白ければよいと考えてしまうこと。

問5 傍線部(ウ)「物語」に不可欠な人生の時間軸」とは、どのようなものか。次の①～⑤の説明のうちで適当なものを一つ選べ。

解答番号は 15。

- ① どんなどきでも自分自身を離れたところから冷静に客観的に眺めること。
- ② 長期的な視野で人生をひとつのまとまった意味あるものとして眺めること。
- ③ 直面する現実に一喜一憂することなく希望をもって未来を眺めること。
- ④ 個人の利害にとらわれずに共同体の一員として社会全体を眺めること。
- ⑤ 将来の自分の在り方をじっくり考えてから今の自分の姿を眺めること。

問6 傍線部(カ)「現在の社会は「待たなくてよい社会」であり「待つことができない」社会」とあるが、筆者は現在の社会をどのようにとらえているか。

次の①～⑤の説明のうちで適当なものを一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 効率が何より優先されスピードが最も価値をもっている社会。
- ② 便利さを極めてしまったために不測の事態には弱い社会。
- ③ 個人個人がばらばらにされて温かい人間関係を築けない社会。
- ④ 自分にとって未知のものや理解できないものを受け付けない社会。
- ⑤ 人間にとって何が真に大切なものなのか分からなくなった社会。

問7 傍線部(キ)「自分の目の前の地面しか見ていない」とはどういうことか。30字以上40字以内で書け(ただし、句読点を含む)。

解答は 記述用解答用紙。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

語り手である「私」と「節子」は二年前に知り合い、婚約する。しかし「節子」の(注1)肺結核の病は進行し、この春、八ヶ岳山麓の(注2)サナトリウムへ転地療養をすることになり、「私」も同伴することになった。「私達はあたかも蜜月の旅へでも出かけるように」山岳地方へ向かう汽車に乗り、南アルプスの景色が見えるサナトリウムの病室にたどり着く。けれども入院後間もなく、院長に「節子」の病が思ったよりも重症であることを「私」は告げられた。

こうして私達のすこし風変りな愛の生活が始まった。

節子は入院以来、安静を命じられて、ずっと寝ついたきりだった。そのために、気分の好いときはつとめて起きるようにしていた入院前の彼女に比べると、かえって病人らしく見えたが、別に病気そのものは悪化したとも思えなかった。医者達もまた直ぐ快癒する患者として彼女をいつも取り扱っているように見えた。「こうして(ア)病気を生捕りにしてしまうのだ」と院長などは冗談でも言うように言ったりした。

季節はその間に、いままで少し遅れ気味だったのを取り戻すように、急速に進み出していた。春と夏とが殆んど同時に押し寄せて来たかようだった。毎朝のように、鶯や閑古鳥の囀りが私達を眼ざませた。そして殆んど一日中、周囲の林の新緑がサナトリウムを四方から襲いかかって、病室の中まですっかり爽やかに色づかせていた。それらの日々、朝のうちに山々から湧いて出て行った白い雲までも、夕方には再び元の山々へ立ち戻って来るかと見えた。

私は、私達が共にした最初の日々、私が節子の枕もとに殆んど付ききりで過したそれらの日々のことを思い浮べようとすると、それらの日々が互に似ているために、その魅力はなくてはならない単一さのために、殆んど後だか先きだか見分けがつかなくなるような気がする。

と言うよりも、私達はそれらの似たような日々を繰り返しているうちに、いつか全く時間というものからも抜け出してしまっていたような気さえする位だ。そして、そういう時間から抜け出したような日々にあつては、私達の日常生活のどんな些細なものまで、その一つ一つがいままでとは全然異った魅力を持ち出すのだ。私の身近にあるこの微温い、好い匂いのする存在、その少し早い呼吸、私の手をとっているそのしなやかな手、その微笑、それからまたときどき取り交わす平凡な会話、——そう云ったものを若し取り除いてしまふとしたら、あとには何も残らないような単一な日々だけれども、——我々の人生なんぞというものは要素的には実はこれだけなのだ、そして、こんなささやかなものだけで私達がこれほどまで満足していられるのは、ただ私がそれをこの女と共にしているからなのだ、と云うことを私は確信して居られた。

それらの日々に於ける唯一の出来事と云えば、彼女がときおり熱を出すこと位だった。それは彼女の体をじりじり衰えさせて行くものにちがいがなかった。

が、私達はそういう日は、いつもと少しも変らない日課の魅力を、①もつと細心に、もつと緩慢に、あたかも禁断の果実の味をこっそり偷みでもするように味わおうと試みたので、②私達のいくぶん死の味のする生の幸福はその時は一そう完全に保たれた程だった。

そんな或る夕暮、私は(注3)バルコンから、そして節子はベッドの上から、同じように、向うの山の背に入って間もない夕日を受けて、そのあたりの山だの丘だの松林だの山畑だのが、半ば鮮かな茜色を帯びながら、半ばまだ不確かなような鼠色に徐々に侵され出しているのを、うっとりとして眺めていた。ときどき思い出したようにその森の上へ小鳥たちが拋物線を描いて飛び上った。——私は、このような初夏の夕暮がほんの一瞬時生じさせている一帯の景色は、すべてはいつも見馴れた道具立てながら、恐らく今を措いてはこれほどの溢れるような幸福の感じをもって私達自身にすら眺め得られないだろうことを考えていた。そしてずっと後になって、いつかこの美しい夕暮が私の心に蘇って来るようなことがあったら、私はこれに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろうと夢みていた。

「何をそんなに考えているの？」私の背後から節子がとうとう口を切った。

「私達がずっと後になってね、今の私達の生活を思い出すようなことがあったら、それがどんなに美しいだろうと思っていたんだ」

「本当にそうかも知れないわね」彼女はそう私に同意するのがさも愉しいかのように応じた。

それからまた私達はしばらく無言のまま、再び同じ風景に見入っていた。が、そのうちに私は不意になんだか、こうやってうっとりとしてそれに見入っているのが自分であるような自分でないような、^②変に茫漠とした、取りとめのない、そしてそれが何んとなく苦しいような感じさえして来た。そのとき私は自分の背後で深い息のようなものを聞いたような気がした。が、それがまた自分のだったような気もされた。私はそれを確かめでもするように、彼女の方を振り向いた。

「そんなにいまの……」そういう私をじっと見返しながら、彼女はすこし噎れた声で言いかけた。が、それを言いかけたなり、すこし躊躇っていたようだったが、それから急にいままでとは異った打棄るような調子で、「そんなにいつまでも生きて居られたらいいわね」と言い足した。

「又、そんなことを！」

私はいかにも焦れたいように小さく叫んだ。

「御免なさい」彼女はそう短く答えながら私から顔をそむけた。

いましがたまでの何か自分にも訣の分らないような気分が私にはだんだん一種の苛ら立たしさに変わり出したように見えた。私はそれからもう一度山の方

へ目をやったが、その時は既にもうその風景の上に一瞬間生じていた異様な美しさは消え失せていた。

その晩、私が隣りの側室へ寝に行こうとした時、彼女は私を呼び止めた。

「さつきは御免なさいね」

「もういいんだよ」

「私ね、あるとき他のことを言おうとしていたんだけど……つい、あんなことを言ってしまったの」

「じゃ、あるとき何を言おうとしたんだい？」

「……^(四)あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだと仰しやったことがあるでしょう。……私、あるときね、それを思い出したの。何んだかあのとときの美しさがそんな風に思われて」そう言いながら、彼女は私の顔を何か訴えたいように見つめた。

その言葉に胸を衝かれてもしたように、私は思わず目を伏せた。そのとき、突然、私の頭の中を一つの思想がよぎった。そしてさつきから私を苛ら苛らさせていた、何か不確かなような気分が、漸く私の裡ではつきりとしたものになり出した。……「そうだ、おれはどうしてそいつに気がつかなかったのさう？ あのととき自然なんぞをあんなに美しいと思ったのはおれじゃないのだ。それはおれ達だったのだ。まあ言ってみれば、節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みていただけなのだ。……それなのに、節子が自分の最後の瞬間のことを夢みているとも知らないで、おれはおれで、勝手におれ達の長生きした時のことなんぞ考えていたなんて……」

いつしかそんな考えを^(五)とつおいつし出して私が、漸々と目を上げるまで、彼女はさつきと同じように私をじっと見つめていた。私はその目を避けるような恰好をしながら、彼女の上に踏みかけて、その額にそつと接吻した。^(六)私は心から羞かしかった。……

(堀辰雄『風立ちぬ』による。一部改変。)

(注) 1 肺結核——「肺結核」は、『風立ちぬ』が発表された昭和十一〜十三年当時は、ほとんど不治の病であった。

2 サナトリウム——sanatorium (英) 療養所。新鮮な空気や日光に恵まれた高原や海浜などで、主として肺結核の治療を行う療養所のこと。

3 バルコン——balcon (仏) バルコニー。洋風の建築で、階上の室外に張り出した手すり付きのところ。露台。

問3 傍線部(イ)「私達のいくぶん死の味のする生の幸福」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 21。

- ① サナトリウムの病室ではあるが、まるで新婚生活のように彼女と一緒に、魅力ある日々をただ繰り返すことができる幸せ。
- ② 彼女は死の病に苦しんでいるが、その苦しみを忘れるほどの喜びに満ちた日常生活を、二人で一緒に暮らすことができる幸せ。
- ③ 死の匂いのするサナトリウムではあるが、いくぶん病が回復した彼女と一緒に日常生活を、喜びをもって生きることの幸せ。
- ④ 彼女は病で死にかかっているが、その残り少ない人生のささやかな日常生活を、できるだけ彼女と一緒に懸命に生きる幸せ。
- ⑤ 彼女は肺病で死にかかっているが、わずかな希望を抱きながら、とりあえず彼女と一緒に生きることができる日常生活の幸せ。

問4 傍線部(ウ)「あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだと仰しやっただことがあるでしょう」とあるが、この箇所は、作者の堀辰雄が師と仰ぐ芥川龍之介の思想の影響があるといわれている。次の①～⑤の芥川の言葉の中から、この箇所と最も近い内容が述べられているものを一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 「美しい蜃気楼は砂漠の天にのみ生ずるものである」
- ② 「恋愛の死を想わせるのは進化論的根拠を持っているのかも知れない」
- ③ 「文章の中にある言葉は辞書の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ」
- ④ 「自然が美しいのは僕の末期の眼に映るからである」
- ⑤ 「万人に共通した唯一の感情は死に対する恐怖である」

問5 傍線部(エ)「私は心から羞かしかった」とあるが、どうしてか。本文全体を踏まえて、次の□に入る適切な文章を50字以上

60字以内で書け(ただし、句読点を含む)。解答は記述用解答用紙。

或る夕暮、二人が同じように見入っていた景色から異様な美しさを感じたが、

□

第3問 次のA～Eの四字熟語および故事成語について、空欄□に当てはまる語を【語群】①～⑩の中から、意味を【意味】①～⑥の中から選べ。

解答番号は □23 □32。

A	「 <input type="text" value="23"/> 面楚歌」	意味	<input type="text" value="24"/>
B	「五十歩 <input type="text" value="25"/> 歩」	意味	<input type="text" value="26"/>
C	「孟母 <input type="text" value="27"/> 遷」	意味	<input type="text" value="28"/>
D	「五臓 <input type="text" value="29"/> 腑 <small>ぶ</small> 」	意味	<input type="text" value="30"/>
E	「二期 <input type="text" value="31"/> 会」	意味	<input type="text" value="32"/>

【語群】

- ① 七 ② 三 ③ 五 ④ 六 ⑤ 百 ⑥ 千 ⑦ 一 ⑧ 四 ⑨ 万 ⑩ 八

【意味】

- ① 失敗にこりてしまつて、用心し過ぎること。
 ② 茶会の心得を言う言葉で、一生に一度限りであること。
 ③ 身体全体、腹の中、心の中、ということ。
 ④ わずかな違いだけで、本質的には変わらないこと。
 ⑤ 子どもの教育は大切で、その環境にも心を配らなければならないということ。
 ⑥ 周囲がすべて敵で孤立すること。

第4問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

名言は、後世の様々な場面で引用されるものだが、「参加することに意義がある」というオリンピックについての言葉ほど多くのシチュエーションで使われるものもないだろう。

A

しかし、「とりあえず参加しておこう」「力不足でも参加することが大事」というニュアンスでの使い方は、厳密に言うとは誤用である。

この言葉の主とされているのは、国際オリンピック委員会（IOC）の第2代会長を務めた、ピエール・ド・クーベルタン。「近代五輪の父」と呼ばれる人物である。

それは1908年、ロンドンで開催された第4回大会のことだった。

B

「この五輪で重要なことは、勝利することより、むしろ、参加したことにあるう」

それだけ勝利のみを求めた選手たちの競技への姿勢が、見苦しかったということだろう。その言葉を受けて、5日後に大会役員が集まるレセプションで、クーベルタンが次のようなスピーチをした。

「ペンシルベニアの司教が、『五輪大会で重要なことは、勝つことではなく、参加することである』と述べられたのは、まことに至言である。

C

このような教えを広めることによって、いつそう強固な、いつそう激しい、しかもより慎重にして、より寛大な人間性を作り上げることができる」

勝利か敗北か。それはあくまでも結果に過ぎない。重要なのは、最大限努力してよく戦うことなのだ、というのがクーベルタンの伝えたかったことだ。

D

しかし、後世に残ったのは、前半で引用した司教の言葉だけだった。

「参加することに意義がある」というフレーズが広まったのは、1932年の第10回ロサンゼルス大会以降である。選手村の娯楽室に「クーベルタンの言葉」として掲げられたのが、きっかけだと言われている。

何十年前の名言が、思わぬ形でクローズアップされることになったのだが、せっかくなら、誤解のないように、クーベルタンの言葉の後半部を強調してほしかった。

E

(山口智司『名言の正体―大人のやり直し偉人伝』による。一部改変。)

問 空欄 A ~ E の中には、次の①~⑤のいずれかの文章が入る。最も適当なものを一つずつ選べ。

解答番号は A ㉡ 33、B ㉡ 34、C ㉡ 35、D ㉡ 36、E ㉡ 37。

- ① もしかすると、本番前でナーバスな選手が娯楽室でリラックスするためには、今の誤解されたもののほうが、よかったのかもしれないが。
- ② 「まだ力不足ですが、参加することに意義がありますから」
- ③ 人生において重要なことは、成功することではなく、努力することである。根本的なことは征服したかどうかにあるのではなく、よく戦ったかどうかにある。
- ④ 参加するのが至上目的ではなくて、勝利よりもそれに至る努力の大事だということを、オリンピックの父は説いたのである。
- ⑤ 国民感情のぶつかりから、競技場においてイギリスとアメリカが一触即発のムードに包まれていた。そのため、アメリカのペンシルベニアから来たエチエルバート・タルボット司教が、参加選手にこのように説教した。